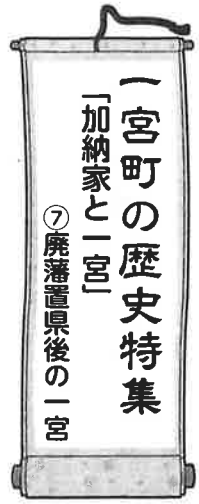


平成30年10月号



今年(明治維新から150年)の年。

NHK大河ドラマ「西郷どん」でも大政奉還や王政復古の大号令がえがかれました。

そののち勃発した旧幕府軍と新政府軍との軍事衝突(戊辰戦争)の際、上総一宮藩藩主の加納久宜は、旧幕府軍側で戦おうとしますが間に合わず、最終的に新政府軍に服属したといえます(異説あり、当初より新政府軍側であったとも)。

戊辰戦争後、明治4年(1871)4月、廃藩置県が行われ、藩は廃され県が置かれます。ここに「一宮県」が誕生します。基本的にはこの時、旧藩の領地がそのまま「県」に変わったのみとなります。そのため、一宮県の範囲には旧一宮藩領の現茨城県南部の一部なども含まれていました。

この年の11月に木更津県(のちに千葉県となる)に合併されてしまったため、一宮県が存在したのはわずか7か月のみ。行政組織については「一宮県歴史」(千葉県史料近代篇明治初期)所収)という資料に書かれています。

の実態についてはいまだ不明な点が多いです。

近年、「一宮民政局」の印が押された史料が新たに発見されました。茨城県利根町の「吉浜家文書」に同じ印が押された史料が確認されているため、原史料であることが確定できました。

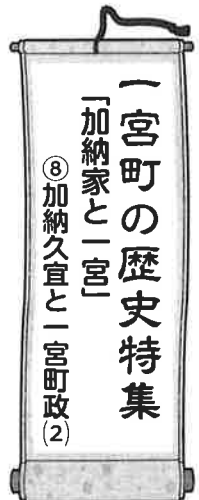
この資料は一宮県の範囲であった下総国相馬郡羽中村(現茨城県利根町)に宛てたもので、内容は当時この村に在住していた70歳以上の高齢者を祝うものです。この当時の時代背景を考えると、大変興味深い内容です。このような内容の資料が残ることも大変珍しいことであり、一宮県の行政実態を知るうえで、貴重な資料といえるでしょう。



▲「一宮民政局」の印
(史料：個人所蔵、町教委寄託)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成30年11月号



全国農事会会長、鹿児島県知事時代の

の農政改革など、農業に大きなかわりを持つていた加納久宜。「日本農政の父」とも称される久宜は、近年の研究で、生家の立花家の本家・柳川立花家の当主・立花寛治(1857-1929)に対して農業面で様々な助言を行っていた事が分かっています。

久宜の一宮での農業面での活躍は「耕地整理」です。古代以来、現在の国道付近より東側は湿地帯でした。そのため、明治中期までの人々の生活の中心は漁業を除いては、玉前神社周辺と現在の外房線の線路の西側地域でした。

現在、一宮停車場の両脇には水田が広がり、家も立ち並んでいます。この地域の耕地整理を進めることに一役買ったのが久宜です。

この地域の耕地整理が動き始めたのは明治41年(1908)11月、久宜が町長に就任する年前のことになります。元一宮町長・中村祐吉郎を中心に現在の上総一ノ宮駅の東側約百五十四町五反余(約153万㎡)の耕地整理

計画が始まりましたが、周辺住民の反対や「祟り田」の迷信もあり、難航しました。

そこで中村らは久宜を整理組合長に招きます。かつての藩主・殿様ということもあって反対していた人々も少しづつ従ったといえます。

その結果、大正3年(1914)3月に耕地整理は終了、総額で17950円(現在の貨幣価値で約6000万円)の費用を投じたといえます。

耕地整理により、一宮は農業面でも飛躍的に発展しました。しかしこの事業には久宜だけでなく、中村元町長を中心とした町民有志の努力があった事を忘れてはいけません。



▲ 役場屋上から見た田園地帯。
この地域の耕地整理に久宜関わった。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416